

# 「六条御息所」

代田早苗

## 第一章 理想の女性と六条御息所

### ——「夕顔」の巻

六条御息所と思われる人は、「夕顔」の巻冒頭に、「六条わたりの御忍びありきの頃<sup>註1</sup>」として、はじめて登場する。彼女ははじめ、源氏によって「あながち」なまでに求められた。それは、源氏が「たぐひなし」と思い、「さやうならむ人をこそ見ぬ、似るものなくもおはしけるかな」（「桐壺」）と、自らの理想としていた藤壺に代わりうる人と思われたからであろう。

理想的女性とは、どんなものか。源氏をまじえて、頭中将、左馬頭、式部丞によって、さかんに女性論がたたかわされた、「帚木」の巻の「雨夜の品定め」によると、風流にはしりすぎもせず、実用一点張りでもない女性。度をすぎた嫉妬をせず、そうかといって全然拘束しないのでもなく、憎らしくない程度にほめかす女性。可

憐であって、しかもいざという時にたよりになる女性。知っている事も、言いたい事も、全部言ってしまうのではなく、一つ二つのことしておく女性。ということであり、どちらにもかたよらず、過不足のない、中庸を得ている女性が、理想とされたのであった。

中庸が理想とされたのは、それが誰にとつての理想であったかという点と、関わりあっている。一夫多妻が一般であった当時において、一人の男性が何人かの女性を治めるためには、女性一人一人が強い個性を持つことは好ましくない。中庸は、男性にとつて最も好ましい女性の徳だったのである。

「雨夜の品定め」で、頭中将らが中庸を理想としたのは、もちろんこの立場からであり、源氏が、この女性観を藤壺に結びつけて、「これは、足らず、又さしすぎたる事なく物し給ひけるかな」（「帚木」）と思うことから、藤壺を理想の女性と考えたのも、同じ意味で首肯されることである。このことは、藤壺をして主体的に生きる

ことを許さず、男性の愛玩の対象として生きた人形となることを要求する。その意味では、この後源氏によって、藤壺そっくりに育てられる紫上も、やはり例外ではない。

そのような藤壺と対立するような形で、六条御息所が登場する。

彼女は、「木立、前栽など、なべての所に似ず、いとどかに心にくく住みなし……打解けぬ御有様などの、気色ことなる」人であって、身分、教養、心ぶかさにおいては、藤壺にも決してひけをとらない女性であった。しかし、彼女は一面、「ものをあまりなるまで思ししめたる御心さま」という点で、藤壺の中庸とは全く反対の性格をもつ女性だったのである。それゆえに、始めは熱心に求愛した源氏も、やがてうってかわって冷く扱うようになったのであるが、私は、彼女が、男のための生きた人形ではない、血の通った女として、この後作者によってどのように追求されていくかという点に関心を抱くのである。

## 第二章 執念の女

### 第一節 生霊——「葵」の巻

源氏は、「わらはやみ」の治療に北山へ出かけた時、藤壺に瓜ふたつの少女を見出した（「若紫」）。紫上である。実は彼女は藤壺の姪であった。やがて源氏は、この人をひきとり、「心のままに教へ

おほし立て」ようとする。その結果、「そのうつくしみに心入り給ひて、六条のわたりにだにかれまざる」（「末摘花」）ということになってしまふ。とうとう、御息所は、娘齋宮と共に、伊勢へ下ることを思うに到る。

まことや、かの六条の御息所の御腹の前坊の姫宮、齋宮に居給ひにしかば、大将の御心はへもいと頼もしげなきを、かくをさなき御有様のうしろめたさにことつけて、くだりやしなましと、かねてよりおほしけり。（「葵」）

彼女が高い身分の婦人であることは、「夕顔」の巻においても、「心にくく住みなし給へり」「打解けぬ御有様」という敬語が用いられていることから、察せられたのであったが、ここではじめて、前東宮妃という、この上ない高い身分であることが明らかにされる。

折から葵上は懐妊し、源氏の訪れは更に遠のいて、御息所の懐悩は深くなる。一方源氏は伊勢下向に閑しても、はかばかしい返答をせず、御息所は心を定めかねるのであるが、そのような折、心をなぐさめようと出かけた賀茂の御櫻見物において、車争いがおこる。

葵上一行がやって来た時には、すでに物見車がつまっていた。そこで一行の場所をあげさせるために、他の車をおしのけていく。その中に御息所の車もあったのである。従者は「これは更にさやうにさしのけなどすべき御車にもあらず」と制止したが、葵上方は御息所

と知って、「さばかりにてはさな言はせそ。大将殿をぞ蒙家には思ひ聞ゆらむ」と無礼なことをはき、遂に御息所の車は、物も見えない奥へおしやられ、榻なども押し折られてしまふ。このような扱いは、源氏を中にしてのライバルである葵上によつて受けたということは、御息所にとっては最大の屈辱であつた。彼女は、前東宮妃という身分も、教養も、何もかも放り出して、ただの女として、「いみじうねたき事かきりなし」と反応するのである。この敗北は、源氏につれなく扱われ、伊勢へ下ろうかと思つた御息所に、更に追いつちをかけるものであつた。御息所は、全く絶望的なところまで来たのである。それにもかかわらず、行列が来たと言われると、「つらき人の御前渡り」が待たれるというところに、即ちどうしても源氏を思いきれないところに、生霊になるしかない必然が出てくるのである。このことは、御息所が詠んだ「袖濡るる泥と且は知り乍ら下立つ田子のみづからぞ憂き」の歌にも、はっきりあらわれている。

車争いの後、御息所のもの思いはまさり、一方葵上は、多くの物の怪に苦しめられる。その中に執念き物の怪が一つあつて、その正体について、御息所か、二条の君かと噂される。このように葵上が重く病んでいるのに対して、桐壺院からも度々お見舞があり、世間の人々も「あまねく惜しみ聞ゆる」のを耳にして、御息所は「ただ

ならず」思うのである。又、葵上を苦しめている物の怪が、自身の生霊だとか、故父大臣の死霊であるとか噂されるのを聞いた御息所は、「さもやあらむ」と思ひあたることもあり、実際に、葵上のところへ行つて彼女をなぐる夢を何度も見たことから、「げに身を捨ててやいにけむ」と思ひ、そんな噂をたてられる自らを嘆くのである。出産の時、物の怪はようやくその正体をあらわしたが、それはやはり、御息所の生霊であつた。夕霧が無事に生まれたのに対し、御息所は、「ただならず。かねてはいと危く聞えしを、たひらかにもはた」と、ねたましく思ひ、自らが芥子の香にしみ返るのを歎き、いっそ「御心がはり」もまさつてゆくのである。そして遂に葵上は死んでしまふ。このように生霊事件は、車争いの後の葵上と御息所との二人に中心をおき、御息所の心理と、葵上の病状とを関連させることによって、話がすすめられていくのである。

一方、源氏はこの事件をどう受けとめているかという点、実は彼自身とぬきさしならぬ関係にあつたはずなのに、葵上と御息所との二人の間の問題としか見ていないのである。又、彼は、車争いは葵上の、生霊となるのは御息所の疵によるものとみなしているため、自身はこれによつて何の傷も受けてはいないのである。葵上が死んだ後、彼は、「憂しと思ひしみにし世も、なべて厭はしくなり給ひて、かかるほだしだに添はざらましかば、願はしきさまにもなりな

まし」とまで思うが、そうした気持も、彼がこの事件を、自身に責任のある、あるいは、自己の内奥に関わるものととらえたことによるのではなく、生霊を「さだ／＼とけざやかに」見、葵上の死を見たことによって生じたものに過ぎない。だからそうした思いも葵上を思い出すことによって、呆気なく消えてしまうのである。

久しぶりに二条の院に帰ってみると、葵上は「うちそばみて恥ぢらうほどに大人びており、源氏は「火影の御傍目、頭つきなど、只かの心つくし聞ゆる人の御さま、たがふところなくなりゆくかな」と嬉しく思うのである。ここにおいて、葵上が死んだ今、藤壺の代わりを十分に果せるまでに成長した葵上が、源氏の愛の世界の中心にすえられようとするのである。ほどなく新就をかわした源氏には、生霊事件後、世の中を憂しとみた気持も、実は葵上と離れるのがいやさに、他の通い所へ出向かない、この口実でしかない。ただ、生霊を目前にしたことによって、恨みの恐しさは身にしみて、「何かは、かばかり短かめる世に、かくて思ひ定まりなむ」と思うのである。

こうみてくると、御息所の生霊事件は、葵のゆかりで統一するためには邪魔者であった葵上を死亡させ、女の恨みに懲りた源氏をして、葵上ただ一人に集中せしめるといふ、構想上の役割を果すものと見ることが出来る。しかし、六条御息所がこのためにのみ登場さ

せられたと考えるのは誤りである。彼女はこの後も、一人の人間として生命を与えられているし、作者はこの生霊をも、単なる構想上の手法としてのみ扱ってはいないからである。この点は、後で死霊とあわせて、改めて考えてみることにしたい。

## 第二節 消えやらぬ執念―「賢木」の巻

葵上の死後、世間の人々も、御息所の周囲の人々も、今度こそは御息所が正妻にと思ったのであったが、源氏からは何のたよりもない。そこで御息所は、「誠に憂しとおぼす事こそありけめ」と知り果てて、伊勢下向を決意するのである。この伊勢下向については、既に「葵」の巻で、御息所が下向を思いたつ動機として、「大将の御心ばへもいと頼もしげなきを」と語られたことから、又、源氏によって、「故は飽くまでつき給へるものを、もし世の中に飽き果てて下り給ひなば、さう／＼しくもあるべきかな」と、この下向が「世の中に飽き果て」ての行為として受け取られていることから、このことが単に、距離的に京を離れるというだけではなく、俗世を離れることであつたことが理解される。即ち、六条御息所の伊勢下向は、当時の女性が一夫多妻のもとに苦しみ、その苦悩に耐えて、ぎりぎりのところまで来た時、このような苦しみからの脱出として出家するのと、同質のものと言えよう。

さて、御息所が伊勢へ発つ日が、今日明日にさし迫った時、源氏は野宮を訪れる。

遙けき野辺を分け入り給ふより、いと物あはれなり。秋の花皆衰へつつ、浅茅が原もかれくゝなる虫のねに、松風すこく吹きあはせて、そのことも聞き分かれぬ程に、物のねども絶えくゝ聞えたる、いとえんなり。

この部分は、従来、名文とされているものであるが、こうしたあはれな背景にたすけられて、この時の対面には、二人の間がこじれる前、心の通い合ったことを思わせるものがあり、源氏は「来し方ゆく先おぼしつづけられ」て、心弱く泣く。そして、

女は、さしも見えじとおぼしつむれど、え忍び給はぬ御気色を、いよゝ心苦しう、なほおぼしとまるべきさまをぞ聞え給ふめ。月も入りぬるにや、あはれなる空を眺めつつ恨み聞え給ふに、こころ思ひあつめ給へるつらさも消えぬべし。

とある。ここで六条御息所は、「女」とよばれる。「女」とよばれる時、その人物は、社会的なすべての制約や、人間関係を脱ぎすて、ただ男に対する女としてみられているのである。<sup>註2</sup>ここには、恋する男と女だけが存在する。更に推量の助動詞「めり」が用いられることによって、他の者の介入を許さない、二人だけの時であることがより明らかになる。

### 「六条御息所」

しかし、夜が明けてきた。男君は、

あかつきの別はいつも露けきをこは世に知らぬ秋の空かな  
とうたい、女君の手をとらえて、しばしやすらう。それが大そうおやさしい、とある。

出でがてに御手をとらへてやすらひ給へる、いみじうなつかし。

源氏はこれまでも御息所を丁寧に扱ってきたのであったが、それは多分に儀礼的なものであった。現に、ここへ訪ねて来たのも、院が御病気で御心のいとまはないけれど、「(御息所が)つらきものにして」ひ果て給ひなむいとほしく、人間きもなさげなくやと、おぼし起して」とあるように、愛情からというよりも、むしろ世間体を気にしての行動であった。しかし、「昔覚えた」る対面を経た今、男君は、そういう儀礼的な姿勢からぬけ出て、ごく自然に、「御手をとらへ」という行為に出たのであり、それゆえにこそ「いみじうなつかし」と言い得るのである。この「いみじうなつかし」は、地の文であるが、この言葉には、はじめて源氏にほんとうにやさしいふるまいをされた女君の、心のふるえが描かれているように思われるのであり、それゆえに、また、官能的なものさへ感じられてくる。源氏が帰って行った後、男君の面影が去らず、その「名残」の中にひたっている御息所には、「女房たちと見解を一にする」<sup>註3</sup>ところの、

「月影の御かたち」「なほとまれる匂ひ」と共に、帰りがわの御手のなごりが、当然あつたはずである。

今となつては、いくら源氏がやさしくしてくれても、伊勢下向をとりやめることはできないが、ともかくこの時は、源氏は実のある態度を示したのであり、御息所も別れた後までも、その余韻の中にしみじみとひたっているのである。ところが、次に読みすすんだ時、やはり執念が消えたのではないことを知る。

旅の御装束よりはじめ、人々のまで、何くれの御調度など、いかめしう珍らしきさまにて（源氏から）とぶらひ聞え給へど、（御息所は）何ともおぼされず。あはくしう心憂き名をのみ流して、あさましき身の有様を、今始めたらむやうに、程近くなるままに、起き臥し歎き給ふ。

地の文は、「こころ思ひあつめ給へるつらさも消えぬべし」と語つたにもかかわらず、あの野宮の別れは、彼女に何の変化も与えていない。彼女はもとのままの身の有様を歎く女なのである。御息所自身、野宮のあはれさに、今までの源氏に対する恨みを許したつもりであつたらう。しかし、御息所の意識しない内部には、つきるところをしらない執念があつて、それが彼女自身予想もしない時に、頭をもたげてくるのではないだらうか。

その後、須磨へ下つた源氏に、伊勢から寄せられた御息所の文に

も、これと同種の執念が感じられる。他の婦人たちからの手紙が二、三行であつたのに対して、御息所のは、「物をあはれとおぼしけるままに、打置きく書き給へる白き唐の紙四五枚ばかりを巻き続け」た長いものであつた。そして、贈られてきた歌といい、消息といい、彼女自身の憂きなげきをこめたものであつた。このようなところからも、御息所の消えやらぬ執念がうかがわれる。

### 第三節 出家の中の女——「落標」の巻

源氏が須磨から帰つて来た後、御息所親娘も、朱雀帝護位のため、伊勢から帰京した。六条御息所は、源氏と文を通わずだけで、静かに暮していたが、忽におもく煩つて出家した。

俄におもく煩ひ給ひて、物のいと心細くおぼされければ、罪深きところに年経つるもいみじうおぼして、尼になり給ひぬ。

ところが、源氏がそのことを聞き、おどろいてやって来て、「絶えぬ志の程は見え奉らでや」といみじう泣いた時、「かくまでおぼしとどめたりけるを、女もよろづにあはれと思して」と「女」になる。源氏と御息所は、「かけくしき」関係でなくなつてから久しい。まして今や、御息所は出家した身である。それなのに「女」とよばれているのである。私は、御息所が伊勢へ下る直前、「今始めたらむやうに」憂き名を流したのを嘆くところで、彼女の中に

は、彼女自身意識しない執念ぶかきがあることを言ったが、こゝでも、一見、「女」からぬけ出ているように見えながら、実際は、奥深いところで、まだ「女」がくすぶりつつづけていることが示されているのである。

そんな彼女が、斎宮を源氏に托するに際して、自分の苦しかった生涯をふり返り、「憂き身をつみ侍るにも、女は思ひのほかにて、物思ひを添ふるものになむ侍りければ、いかでさる方をもて離れて見奉らむと思ひ給ふる」と述べ懐する。源氏との恋に苦しみ、生霊という、とまじい姿になり、最後には出家までしながら、しかもまだ「女」である御息所が、この苦しみだけは、娘に味わわせたくなかと思つのであろう。そのためには、若い娘を、最初から「男」「女」のない世界におくりこむことも辞さないのである。この言葉は、「女」である六条御息所の口から出ているがゆえに、真実味があふれており、作者によって強い関心がもたれ、紫上、女三の宮、大君、浮舟などによってすすめられていく問題である。

御息所は、この日から七、八日して、この世を去った。

### 第三章 死霊の意味

#### 第一節 怨霊信仰と御息所の形象

六条御息所は、死後十七年を経て、今度は死霊となって再び登場

「六条御息所」

する。「葵」の巻の生霊と共に、御息所には、生霊、死霊という形象が与えられているわけであるが、このことは、源氏物語の中でどのような意味をもっているのか。

いったい、生霊、死霊など怨霊の恐怖が強く人々を支配しはじめるのは、平安初期・桓武天皇の頃からである。この場合考えられた怨霊は、井上皇后、早良親王、伊予親王、その母藤原吉子、藤原仲成、橘逸勢、文室宮田麿、菅原道真らの、政治的失脚者のそれであった。そして彼らは単に、個人に祟るだけではなしに、異常な天候、凶作、疫病の流行などをもたらし、広く社会に祟ったのであった。怨霊が社会的広がりをもったことについて、肥後和男氏は、国民の自覚がたかまり、政治に対する関心がつよまり、政治批判を行うようになったためと、述べておられる。<sup>註4</sup>この怨霊をしずめるために、しばしば追号がなされ、又、八六三年には、神泉苑で御霊会なども行われたのであったが、これらは、菅原道真を最後として平安時代前半でおわる。ところが後半においては、後宮を中心とした怨霊があらわれてくるのである。<sup>註5</sup>当時の摂関政治体制においては、権勢を握るための前提として、娘を後宮にいられて帝の寵愛を得させ、さらに運よく皇子が生まれたならば、今度は立坊争いに勝ち残って外戚となることが求められた。従って、後宮が権力闘争の場となったのであり、その闘争に敗れたものは怨霊となって、後宮を中

心に祟るのである。それは基本的には、政治的なものであったといえる。しかし、前期の怨霊と、後期のそれとの違いは、後者においては、女性が関わってきている点である。その父、兄、家族、一門において、後宮での競いは、政治的な意味のものであったが、その渦中に巻きこまれている当の女性にとっては、それはあくまで愛情の問題であった。だからその競争に敗けることは、一門にあっては、政界から閉め出されることであったが、女性にとっては、愛情を失うことであり、男女のなかを「世」とよんだ彼女たちにとっては、また世間に対する面子を失うことでもあった。女性にあっては、愛情と、それに関わって、面子との両面において、怨霊というものが考えられてくるのである。

例えば、元方、祐姫親娘が、師輔、安子に立坊争いで敗れ、落胆の果てに彼等及び広平親王があい統いて没すると、後に、冷泉帝の狂気など、すさまじい祟りをみせるのも、表面に出てくるのは、元方の霊であるが、その陰に、父・元方とは違った意味での祐姫の怨霊が感じられる。もっとはっきりした例は、按察御息所に生まれた村上帝の女三の宮・保子内親王の例である。兼家は、この宮を心にくくめだきものに思い通ったが、やがて超子に仕える女房大輔に心移して仲絶えた。宮はこれを、はずかしい事と思ひ歎いて世を去ったが、その後、兼家が二条院の邸宅で病み、そこに種々の物怪

が現われた中に、保子内親王の霊がいりまじって出現し、兼家はついに再起不能となり、六十二歳の生涯を閉じたのである。<sup>註6</sup> 又、時代は少し下るが、顕光なども、常に娘・女御延子を伴ないながら祟り歩いている。

こうした例によって、平安朝後半の怨霊には、女性が関係したところ。そして、男性の怨霊が政治的失脚に由来するのであったのに対して、女性のは、愛情と面子がからんでいたことが推察されるのである。六条御息所の生霊、死霊が描かれた社会的基盤として、このような怨霊信仰が存在したことは否定できないと思う。「葵」の巻においては、御息所が、車争いの敗北を、愛情と面目を失った象徴的な出来事としてうけとめ、しかも源氏をあきらめることができないうところから、生霊となったのであるが、死霊も、源氏が紫上との睦語の中で、御息所を悪しざまに語ったことを恨んであらわれるのであり、これもやはり、愛情と面子にかかわっている。

六条御息所が、生霊や死霊となるのは、愛情のために怨霊となることだが、現実問題として考えられていた当時の一般的信仰に基づく形象であり、六条御息所はその意味において、当時の貴族社会における女性たちと全く同じ人間であったといえる。言いかえるならば、作者は六条御息所に、生霊、死霊という時代的な形象を与えることによって、その時代に生きたリアルな女として創り出す上での、



一つの重要な方法としていえると言えぬ。

## 第二節 秋好中宮の役割

ところが六条御息所は、死後十七年を経過して、「若菜下」の巻に、突如死霊としてあらわれる。これはどういうわけか。私は、六条御息所の死と、死霊との間にあるものとして、御息所の娘・前齋宮に注目したい。

御息所の死後、前齋宮は源氏によって後見されるが、これについては、一つには、源氏自身の権勢の確立ということが考えられる。当時において、権勢を得るためには、娘を入内させて、皇室と外戚関係をもちが必要であった。源氏が明石姫君の誕生を聞いて、「わが御宿世も、この御事につけてぞかたはなりける」(「濡標」)と、須磨流謫を、この姫君が生まれる為のものであったとまで思うのも、当時において女子がいかに大切であったかを物語るものである。源氏は内大臣であり、妻子冷泉院が即位しているのであるが、そのことはあくまでも秘密であって、公認されていることではない。既にライバル・権中將は娘を入内させているのに対して、源氏の娘・明石姫君はまだ生まれただけであり、役に立たない。こういう状況の中で、六条御息所の遺した前齋宮は、源氏に求められるのであり、源氏は藤壺の力を借りて、朱雀院の求めさえ退けて、

### 「六条御息所」

彼の養女として入内させたのである。そして先に参り給った権中將の娘・弘徽殿や、式部卿の娘など、有力な人々を退けて、この女御が立后争いに勝利をおさめる。そして源氏は太政大臣となり(「少女」)、その権勢はゆるぎのないものとなったのである。しかし、前齋宮の後見については、もう一つの意味が考えられるのであって、この方が御息所の死霊との関連においては重要である。御息所の死後、源氏は葬儀のことなど、人々に指図し、力になるので、周囲の人たちには「年頃の御心ばへ取りかへしつべう」見えるほどである(「濡標」)。しかし、当の源氏は、自分が六条御息所の生前、彼女を「ずいぶん憂き目にあわせたことから、彼女は自分に深い恨みをもったまま、この世を去ったであろうことを感じる。その恨みは、簡単に晴れるとは思われない。それ故源氏は、御息所が彼に托していた前齋宮を立派に後見することによって、御息所の恨みが消えるのではないかと考える。そこで彼女を入内させることを思いつき、藤壺にもはっきりその考えを話して、力になってもらうのである(「濡標」)。前齋宮の入内、そして絵合など、源氏はその後見に心をつくすのであるが、それでも、女御に対して、

あさましろのみ思ひつめてやみ給ひにしが、ながき世のうれはしきふしと思ひ給へられしを、かうまでも仕うまつり御覽せらるるをなむ慰めに思ふ給へなせど、燃へし煙のむすばほれ給ひ

けむは、なほいぶせうこそ思ひ給へらるれ〔薄雲〕

と述懐しているところには、御息所の死霊に対する彼の不安が読みとられるのである。そこで更に、この梅壺を中宮にまで進める。世人は、母・六条御息所と比べて、「御さいはひの斯くひきかへすぐれ給へりける」を驚くのであった〔少女〕。又、源氏は、秋好の後見を十分することによって、「宮に斯く後見仕うまつることを、心深うおはせしかば、亡き御影にても見なほし給ふらむ」〔梅枝〕と、不安から遠のくことができ、最後には、「中宮をかく、さるべき御契とはいひながら、取り立てて世の譏人のうらみも知らず、心よせ奉るを、かの世ながらも見なほされぬらむ」と、確信するのであった〔若菜下〕。

こうしてみると、源氏による秋好の後見は、ある時は御息所の怨みを恐れ、ある時は少し不安から解放されたりしながら、終始六条御息所の怨霊を意識してのものであったことがわかる。

六条御息所の死霊が、死後十七年経ってあらわれたことは、唐突に感じられるようでもあるが、実際はその間、秋好を中には喜んで、源氏は常に六条御息所とむかい合っていたのであり、何とかして御息所の恨みをはらそうと必死だったのである。

さて、こうしてあらわれた死霊は、どんな意味を文学的にもつのだらうか。次に考えてみたい。

### 第三節 御息所の生霊、死霊の文学的意味

#### 1

さて、冷泉院は退位するが、秋好は皇子も生まないのに、源氏に皇后にしてもらっていたために、その地位は安泰である。その源氏の心づかいを、秋好はいっそうありがたく思うのであった〔若菜下〕。それほどまでに中宮の後見に心をつくしたという自信が、女楽の後、紫上に御息所の思い出話を語ったあとで、「かの世ながらも見なほされぬらむ」と、源氏に確信をもって言わしめたのである。しかし、彼の自信を全くうらぎって、その翌日から紫上は、御息所の死霊のために病に臥す。そしてこの死霊は、女三の宮をも出家させてしまうのである。

これまで正妻格であった紫上は、女三の宮の降嫁の後、かつて経験したことのない苦悩を味わう。しかし彼女は、源氏を信じることによって、それに耐えた。が、彼女自身は必死に信じようとするにもかかわらず、しだいに源氏と離れた世界へ入っていく。彼女の不幸は、当時一般であった一夫多妻に由来するものであったから、源氏に訴えたところではないものであった。又、彼女が後に、「心にのみこめて、無言太子とか、法師ばらの悲しき事にする昔の

臂ひのやうに、あしき事よき事を思ひ知りながら、うづもれなむも、いふかひなし」(夕霧)と、女について述べているように、女である紫上には、言うすべがなかった。ただ、不束な私には過分の幸福と人の目には見えませんが、心一つにおさえきれない歎かさが出て参りますのが、却って私の祈禱となって今迄生きているのでしようと、「残り多げなるけはひ」で言うだけである(「若菜下」)。

同じ時に、女三の宮も又、柏木との密通という思いがけない事件がおこり、苦しんでいた。それは、源氏が紫上の病氣にかかりきっているすきに、小侍従の手引きによりおこったもので、彼女にとつて防ぎようのない事であった。彼女は言う言葉も知らず、ただ源氏を恐れて暗がりにおすだけである。そして董出産の後、彼女も又、その苦惱から脱け出す道として出家を考へるのである。

こうして紫上、女三の宮が、全く受動的に不幸の身となり、無言のまま「男要らぬ世界」に入りつつある時、六条御息所の死霊はあらわれる。死霊は、

我身こそあらぬ様なれそれながら空おぼれする君は君なり  
いとつらし〜、と泣き叫び、昔とかわらぬ源氏のつれなさを嘆く。そして、

中宮の御事にても、いと嬉しく奈しとなむ天翔りても見奉れ

## 「六条御息所」

ど、道異になりぬれば、子の上までも深く覚えぬにやあらむ。なほみづからつらしと思ひ聞えし心の執なむとまるものなりける。

と語り出す。母親としての心はうすれ、「女」の面だけが出て来て、源氏に恨みをながたと述べるのである。

ここにおいて二様の女の生き方が対照される。一方は無言で「男要らぬ世界」に入っていく女。一方は「女」を保持しつつけて、死霊となつてまで恨みをながたと述べる女。しかし、どちらにしても不幸である。二つの不幸が対照されることによって、それぞれの不幸がより明確になる。ここまで書きすすめてきた作者の眼には、当時の女性は、どっちみち不幸な人間としてしか映らなかつたのであろう。

## 2

死霊は、紫上と女三の宮に、二度にわたつて憑くのであるが、二度とも、紫上が危篤になり、女三の宮が出家した後になつて、はじめて、それが御息所の死霊のせいであつたとされる。このようなやり方がとられるのは、死霊を登場させることによつて、この出来事に、何か新しい意味づけが行われようとしているためであらう。

さて、この死霊は、源氏の最も大切に思う婦人に憑いたという点

で、一部の生霊と似ている。生霊事件には源氏の愛情がぬききしならぬ形でからんでいたのであるが、源氏はこれを葵上、御息所の二人の争いとしか見ず、生霊となるのを御息所の「疵」とみなし、この事件に対して傍観者の立場をとっている。

一方、二部の紫上の危篤の時にあらわれた死霊は、源氏に憑こうとしたが近づけなかったために、代わりに紫上に憑いたという。これまで紫上の病気は、女三の宮降嫁以後の心労の結果、そうなるのが必然のこととして描かれてきたのであり、源氏の世界とはかみ合わない、女の生き方としてとらえられてきていた。ところがこの死霊の出現によって、紫上の病気が、源氏の過去に犯した罪の結果として、源氏自身に意味をもつものとなる。一部の生霊事件の時には、巻きこまれますに存在しえた源氏が、今度は、くらい事件のただ中に立ち、紫上の病気を、自身の罪として背負わねばならなくなるのである。

では何故、この死霊が再び女三の宮の出家の時に姿をあらわすのだろうか。紫上の危篤に死霊があらわれたことによって、それは確かに源氏の問題となり、彼に大きな打撃を与えた。しかしこの時の死霊は、結局、紫上を殺すことができず、源氏との勝負に負けて出たものであり、泣き叫び、源氏にせつせつと訴えるのである。源氏はかろうじて勝利者として踏止まったのである。そのような源氏に

は、紫上の病気だけは自分の罪として受けとめても、それ以上の広がりには期待できない。密通事件が発覚し、薫を産した後の女三の宮に対しても、あい変らず冷い態度をとる。そしてそのために、女三の宮が苦惱し、出家を望むのを、むしろ喜んだりするのである。ところが、女三の宮の出家の時にあらわれた死霊は

かうぞあるよ。いとかしこう取り返しつと一人をば思したりしが、いとねたかりしかば、このわたりに、さりげなくてなむ日頃さぶらひつる。今は帰りなむ。(「柏木」)

と、勝ちほこって笑う。源氏は完全に負けたのである。彼は、自分の罪の深さを知り、ふかく傷つく。

これら一連の事件は、源氏に手痛い打撃を与え、その苦惱を通して、彼は、自らが傷ついた人間として、人々にいたわりを感じるようになる。薫の五十日の祝では、尼となった女三の宮に、罪の子薫に、そして若くして死んだ柏木に対して、苦しい思いをいだきながら、いたわりの気持をもつ源氏が描かれる(「柏木」)。これより二年後の秋、冷泉院の観月の宴の後で、秋好が「みづからだにかの(御息所の) 焰をさまし侍りにしがな」と言ったのに対し、源氏は、「その焰なむ、誰ものがるまじき事と知りながら、朝露のかかれる程は、思ひ捨てられ侍らぬになむ」と答えている(「鈴虫」)。源氏を単なる栄華をきわめた、理想の人間とだけするのではなく、

すべての人間の罪ぶかき、悲しきに対する深い認識をもつまでに、彼の造型は深められているのである。

3

さて、これまで見てきたことから、六条御息所の死霊は、源氏の恋愛遍歴におわりを告げさせたと云えるが、そのような結末が、作者によって、はじめから用意されていたのではないだろう。むしろ、作者が、さまざまな愛を描いてきて到達したのが、この死霊という形象であつたと見るべきではあるまいか。

一部二部を通して、源氏と多くの女性たちとの愛の交渉が述べられてきた。それらの愛を、作者は決して否定的に扱ってきたのではなかった。しかしここまで書きつづけてきた時、作者は、愛がその半面に罪深さを伴なうことを感じずにはおれなかつた。一部の生霊事件は、車争いの敗北により御息所のもの思いが高じ、生霊となり、ついには葵上を殺すというもので、ここでは御息所、葵上二人の関係、及び生霊の超自然力に関心がもたれ、源氏の愛のもつ罪という点は、追求されずにおわつていた。だが、二部の死霊は、この生霊をも愛の罪深さの結果として包みこみ生霊、死霊の出現を通して、源氏の愛の世界を、六条御息所の悲しみ、言い換えるならば愛のもたらず罪深さの上に築かれたものとして、再設定したのである

「六条御息所」

と考えられる。

4

以上のように、六条御息所の死霊の出現はいくつかの意味をもつ。それは元来、平安朝の貴族社会そのものに理由をもつ一般的な信仰現象であるが、源氏物語においては、既に述べたように、一面において物語の構想に関わっている。そのような例としては、外にも浮舟に憑いた法師の死霊をあげることができる。この場合も、浮舟が入水するまでの必然性が追求されて来たにもかかわらず、最後には、彼女の入水を死霊のせいにする。そしてこの死霊が、かつて大君を殺したものであることを明らかにすることによって、浮舟が大君の人形であつたことを再確認させると共に、入水の後の浮舟の出家が、大君の死の持つ意味の延長上に位置することを明らかにするのである。ただこの三部の死霊が、その正体が法師であろうと<sup>註11</sup>なからうと、「かたへは失ひてしに（大君は殺したが）」（「手習」）という言葉しか意味をもたない、全く構想のためのものであるのに対して、六条御息所の死霊の背後には、彼女の不幸な生涯があり、それゆえに、死霊が構想のために十分な働きを行いつているということに注意すべきであろう。

作者は、物の怪に対して、「なき人にかごと（託言）をかけてわ

づらふもをのが心のをにやはあらむ<sup>註12</sup>」というように、ものけの正体を心の鬼とみる、科学的な精神を持っていたのだが、一方作者は、女性がさまざまな外的制約によって圧えつけられていたあの時代の中で、女が物の怪となるという非科学的な思考の中に、より人間らしいものを見出したのであろう。同じ時代に生きる女としての共感の上にたつて、御息所に生霊、死霊の形象を与え、彼女を生きた女として追求していったと考えられる。

このような生霊、死霊としての形象によって、六条御息所は、単に物語展開の上での舞台廻わし的存在としてだけでなく、生きた女として、物語の中に独立の存立権を主張しうるのである。

### 結章 端役としての六条御息所

これまで、物語にあらわれる順に、六条御息所をたどってきた。彼女は、前東宮妃というこの上ない身分であったが、時として、身分、教養を放り出して、ただの女となった。これについては、車争いに敗れ、「いみじうねたき事かぎりなし」と反応した時、触れた。

又彼女は、内部に、つきるところのない執念をもっていた。これについては、「賢木」の巻で、伊勢へ発つ直前に「今始めたらむやうに」嘆くところで、又「漂標」の巻で、出家の後も「女」とよば

れているところで触れた。

これらは、息づいている女のものであった。更に、愛情に由来する怨霊が、現実問題として存在した当時において、六条御息所に生霊、死霊という形象を与えることによって、その時代の女性と等しい人格となり、生きたリアルな女としての色を増した。

こうして六条御息所は、生きた女として描かれてきたのであるが、物語における彼女の登場は、しばしば「まことや」という形でなされている。<sup>註13</sup>「まことや」は、「ああ、そうそう。物語のなかばでふと思いだした時、または話題を転ずる時にする語<sup>註14</sup>」であり、軽い語り出しの語であるが、そのような軽い扱い方で、御息所は登場させられるのである。例えば「葵」の巻のは、六条御息所が、これから車争い、生霊と最も活躍する時であり、物語の構想とも関わるところである。そういう重要な働きをこれからしようとする御息所の登場にあたって、「まことや」という形で語り出されるのは、いったい何故か。

源氏物語において、作者は、もの中庸を得た婦人を理想の女性とした。このことは、第一章でも触れたごとく、男性の立場から見た女性の理想像であり、これを受け入れた藤壺、及び源氏によって藤壺そっくりに育てられた紫上ら、即ち女主人公たちは、主体的に生きることを許されず、常に男のための生きた人形とならざるをえ

なかった。このため、紫上においては、秋山虔氏も指摘されたごとく、作者自身が「物語に殊更に作り出でたるやうなる御有様なり」(「賢木」)とことわらないではいられない程、現実には生きる女とはほど違いものとなっている。又、二部においては、一部とは全く異つて、女三の宮の降嫁に由来する紫上の苦悩が追求されていくのであるが、それでも、第一部において創造された理想性——中庸は、依然存在し、あまりの苦悩のためか、女三の宮のもとにいた源氏の夢に紫上がみえたので、彼があわてて帰って来た時においてさえも、「すこし濡れたる御単衣の袖を引隠して、うしろもなくつかしきものから、打解けてはたあらぬ御用意など、いと恥しげにをかし」(「若菜上」)というように、中庸的な徳目になんじがらめに縛られてしまっている。又藤壺においても、彼女の死後あらわれた亡霊は、彼女の執念の激しさ、恋情のはげしさを物語るものではあるが、「夢ともなくほのかに」(「権」)源氏の前に姿をあらわすのであるが、「源氏に恐怖感をいだかせるまでには到らず、生きた女のイメージからは遠い。

ここで問題となってくるのは、作者は何故、このような男性の側からの理想の女性を、女主人公にしたのかということである。作者は、主人公・光源氏においては、古物語の主人公にみられる、中立無性格な理想人の観念をうちやぶって、新しい理想像を創りあげた

#### 「六条御息所」

のであったが、女主人公に関しては、それはうち出せなかった。このことは、益田勝実氏の言われるごとく、古代貴族社会における男性と女性の自己解放のたたかひの歴史の深淺に由来するもので、男性においては、好色者という形で新しい自由人のイメージがはっきり打ち出されていたのに対して、女性の境涯の苦しみとたたかう私たちの像は、道綱母の告白的自伝はあったが、まだ社会の共有物として生みだされていなかったためであるとも考えられる。又この問題は、物語がなっていた役割の面からも考えられる。当時において、娘に帝の寵愛を集めることが、権勢を得ることと、密接に結びついていた。このために帝に愛されるための教育が、娘たちに熱心になされたが、物語もその一環としてあった。このことから、姫君が我が身によそえるであろう女主人公にあっては、特に、男性にあって好ましい女性としての制約をうけたとも考えられる。

ともかく、このような女主人公に対して、六条御息所は、はじめこの物語に登場する時から、「ものをあまりなるまでおぼししめたる御心さま」という性格から、中庸を理想とする主人公とはなり得ない人物であり、源氏につれなく扱われる女であり、端役的な存在でしかありえない。理想的女性としての女主人公が、さまざまな制約を受けるのに対して、端役はすべての制約から自由である。真に血の通った生きた女性の像は、端役としてしか設定できないの

であり、だから、生きた女としての六条御息所は、端役として扱われねばならない。とすれば、彼女が重要な働きをする「葵」の巻においてさえ、「まことや」と語り出されるのは、「作者の念頭にさして意味あるものとして存在していなかった」<sup>註1</sup>からではなく、端役として設定されていることによるものと考えられる。又、「須磨」の巻で、文のやりとりにおいて、他の婦人たちよりもはるかに多くのスペースを与えられながら、「まことや騒がしかりし程の紛れにもらしてけり」と語られるのも、このためであろう。六条御息所は、端役として登場することによって、理想的な女主人公たちとは異なる、生きた女であり得たのであり、そのためには「まことや」という形で、女主人公たちの物語の間に登場せざるをえなかったのである。

こうして描かれてきた六条御息所は、第三章三節で触れたように、源氏を中心とした愛の世界のおわりにあたって登場し、作者が源氏の愛の世界を、六条御息所の悲しみの上に成り立ったものとして再設定する時、御息所は更に深い意味をもつようになる。一部二部の世界では、そこに登場する人物は、理想的であるがゆえに、必ずしも生々しい生命を息づいた人々とは言うことができず、それゆえに彼等がおりなす愛の世界も、多分にこしらえものの感がある。しかし、生きた女、六条御息所が端役として登場し、その哀し

みの照り返しを受けることによって、観念的な理想的女性たちも、人間らしい息吹きを与えられていると思われる。六条御息所は、源氏物語一部二部の中で、彼女自身が生きた女であるだけにとどまらず、他をも息づかせる働きをしていると思うのである。

註1 吉沢義則氏「対校源氏物語新釈」をテキストとして使用。

- 2 玉上琢弥氏「源氏物語評釈」(一)清水好子氏「源氏の女君」
- 3 前出、玉上琢弥氏「源氏物語評釈」(一)

- 4 肥後和男氏「平安時代に於ける怨霊の思想」(「史林」第二四巻第一号)

- 5 須田春子氏「道長の後宮独占と怨霊」(青山学院大学「論集」創刊号)

- 6 「栄花物語」巻第三「さまざまのよろこび」

- 7 前出、清水好子氏「源氏の女君」

- 8 武者小路辰子氏「源氏物語の女性像」

- 9 前出、清水好子氏「源氏の女君」

- 10 11 大朝雄二氏「源氏物語の構想についての試論—六条御息所の死霊をめぐって—」(「文芸研究」第五〇集)

- 12 南波浩氏「校本紫式部集」

- 13 「葵」の巻、「須磨」の巻、「落標」の巻において、御息所の登場に際して、「まことや」が用いられている。



- 14 前出、玉上琢弥氏「源氏物語評釈」(二)
- 15 秋山虔氏「源氏物語の登場人物の性格―紫上の初期についてのおぼえ書―」(『国文学』三六年五月号)
- 16 前出、清水好子氏「源氏の女君」
- 17 益田勝実氏「源氏物語の端役たち」(『文学』一九五四年二月号)
- 18 益田勝実氏「源氏物語の到達」(『解釈と鑑賞』三八年一月号)
- 19 玉上琢弥氏「物語文学」前出、清水好子氏「源氏の女君」
- 20 前出、益田勝実氏「源氏物語の端役たち」
- 21 野村精一氏「六条御息所」(『日本文学』三一年九月号)